2025年03月24日 中日新聞 朝刊 13頁

YourScoop ユースクープ みんなの取材班

つながる ひろがる あなたの 声

今回や過去の取材班の記事は特設サイト（QRコード）でご覧いただけます。LINEや郵送、ファクスで取材班とつながる方法も記載しています。記事へのご意見や身近な疑問、情報提供など私たちに皆さんの声を届けてください。

災害派遣医療チーム（DMAT）や災害派遣精神医療チーム（DPAT）のような学生の組織「DMAS」をご存じですか。昨年元日に起きた能登半島地震でも活動しました。高い志を持って勉強している学生がいることを知ってほしいです。 名古屋市の50代主婦

前任地の石川県七尾市で能登半島地震に遭い、DMATやDPATを取材しました。ですが、DMASは知りませんでした。本紙でもほとんど取り上げたことがないようです。投稿を寄せてくれた女性は、家族が活動しているとのこと。未来の災害医療を担う学生たちに話を聞きました。

大野沙羅記者

DMATだけじゃない 学生が奮闘 DMAS

日本災害医学会学生部会

全国8支部 500人が所属

DMAS（日本災害医学会学生部会、Disaster Medical Assistance Student の頭文字をとった略称。2013年に発足した。日本災害医学会に属し、北海道、東北、関東、東海、関西、中国、四国、九州の八つの支部と、有志で設立した災害時対応チームを主体に活動する。24年度は、医師や看護師、救急救命士、薬剤師などを目指す学生を中心に約500人が所属している。

能登半島地震の支援活動で、パソコンに向かって資料を作成するDMASのメンバー＝金沢市で（DMAS東海支部提供、一部画像処理）

災害医療担うため 知識深める

2011年３月の東日本大震災。テレビでは、巨大な津波が押し寄せる衝撃的な映像が流れていた。当時小学４年生だった愛知県立総合看護専門学校２年の大原寿斗さん(24)は、被害の大きさとともに、被災者を支援する募金などの取り組みも覚えている。「何か起きた時に動ける人間になりたい」。小銭を握り締めて募金箱に入れた子どもの頃の気持ちが、災害医療を学ぶ原動力になった。大原さんはDMASの東海支部で24年度の代表を務め、看護師を志している。

DMASは全国の学生が災害医療を学ぶ組織。各地に支部があり、被災地で医療従事者の指導の下、支援活動を行うこともある。

団体は、東日本大震災を機に学生間で災害医療への関心が高まったことで生まれた。発足時のメンバーで、当時は東京医科歯科大（現東京科学大）５年生だった赤星昂己医師(35)によると、東北の被災地で学生が大学の許可を得られずうまく活動できなかった一方、人手が足りない現場もあった。「自主的に災害医療を学び、災害時や平時に貢献できないか」。医師や看護師、救急隊員らが災害時の医療や防災を研究する「日本災害医学会」の協力で、関東の学生ら10人程度が集まって始まった。

会員は年々増え、全国８支部約500人の団体に成長した。各支部でオンラインや対面の勉強会を企画したり、セミナーを開いて医療従事者から災害医療の知識を教わったりしている。全体合宿をして親睦を深める機会もある。

東海支部は、毎年３月の「名古屋ウィメンズマラソン」にもボランティアとして参加。担当するのは医療統括本部の運営の手伝いや情報の取りまとめで、代表の大原さんは「災害時にも生かせる」と話す。災害時に情報を管理する「クロノロジー」と呼ばれる時系列の記録の作成や、衛星電話の使い方、無線での話し方も学ぶ。

「１、２回じゃ自分のものにならない。いろんな場面に触れることが大事」。同支部の浜松医科大医学科２年河内真央さん(20)は学内の災害支援サークルにも所属。大学で災害医療に関する授業はあるが、多くないという。「どの科に進むか決めていないけれど、災害が起きた時に専門外だから動けないって言いたくない」と力を込める。

参加する思いはさまざまだ。北海道支部の札幌医科大医学部４年佐々木柚李さん(22)は、高校生の時に18年の胆振東部地震を経験し、災害医療に関心を持った。道内全域の最大295万戸が停電する「ブラックアウト」が起き、自宅も３日間電気が使えなかった。「困っている人を一日も早く日常に戻す仕事がしたい」と、救急医とDMATを目指す。

DMASの24年度代表を務める岐阜聖徳学園大看護学部４年の橋本佳奈さん(22)は「災害を自分ごととして捉えたいという人が多いのでうれしい」と話す。４月からは保健師として働く。災害時の避難所の現状などを学んだことで「平時からの態勢づくりに興味を持った。地域の人が健康で、災害を乗り越えられるように関わりたい」と夢を語る。

今月開かれた日本災害医学会総会・学術集会記念大会に参加したDMASの学生たち。手をDMASの頭文字Dの形にするのが決めポーズという＝名古屋市港区で

有事に「動ける人間」目指す

3月9日にあった名古屋ウィメンズマラソンで、医療統括本部で業務に当たるDMASのメンバー＝名古屋市東区のバンテリンドームナゴヤで（DMAS東海支部提供、一部画像処理）

プロじゃないけど 役に立ちたい

西日本豪雨や能登地震で活動

DMASは、16年の熊本地震や18年の西日本豪雨などでも現地へ支援に入り、能登半島地震でも活動した。メンバーは被災地で役に立ちたいという思いとともに、学生としての立場での活動に葛藤も抱えている。

「力になれるなら早く行きたい。でもまだプロじゃない。同時に怖さもあった」。DMASの災害時対応チームで統括を務める金城学院大薬学部５年の林南々子さん(23)は、能登半島地震の経験を振り返る。地震直後の昨年１月４日にDMAT隊員から要請を受けたが、すぐに現地へ向かうことはできなかった。余震が続き、道路の寸断や停電・断水もあり、学生の安全が保障できなかったためだ。

そこで、石川県庁に設置された医療や福祉などの支援の司令塔「保健医療福祉調整本部」で、同７日から活動を開始。DMAT隊員らの下で情報の取りまとめや書類の作成を手伝い、約１カ月で、全国延べ46人の有志の学生を派遣した。林さんも県庁で高齢者施設の被災状況などをまとめる作業を手伝った。今後に備え学生の保険加入など課題もあるとしつつ「学生のうちから経験を積める貴重な機会になった」と語る。

DMATとして能登半島地震でも活動した浜松医科大付属病院の高橋善明医師(48)は「最前線での活動は学生にとって身体的、精神的にもリスクが大きい」と語る。日本災害医学会の学生部会支援委員会でDMASの東海支部を支えており、「学生が力になれることもたくさんあり、行かせたい気持ちもあるが、現地に行くのが全てではない。災害時の活動は地域ごとに変わるので、それぞれの地域への落とし込みが大切」と指摘。南海トラフ地震に備え「今いる地域でいろいろな人とつながり、将来に生かしてほしい」と期待する。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています